

優秀修士論文概要

法蔵撰『華嚴三昧観』の基礎的研究

柳 下 實 悠

序 論

華嚴教学の大成者、法蔵(六四三―七一三)の思想は、「果上現の法門」と呼ばれる高踏的姿勢がよく知られることから、形而上学的な思弁に偏っていると見なされる傾向にある。しかし、法蔵は修行者の具体的便益を重視し、階梯的な思想体系(観行思想)を確立することを試み、その成果が複数の観行書として伝承されている。これらの観行書の中で最も早く成立し、法蔵壮年期までの観行思想を表すと考えられる著作が『華嚴三昧観』である。本書の存在は法蔵自身の他著での言及によって知られているが、古くから逸書とされてきた。近代に至り、現存する『華嚴発菩提心章』(以下、『発菩提心章』)と『華嚴三昧章』(以下、『三昧章』)が、『華嚴三昧観』の逸文と一致する記述を有することが明らかになり、いずれがその原形を正確に伝えているかが長年の学術論争の対象となってきた。

この論争の核心は、『発菩提心章』が含有する『法界観門』(伝統的に杜順撰とされる)の扱いをめぐる問題にある。『発菩提心章』と『三昧章』の構成はほぼ同一であるが、前者が『法界観門』全文を含有するのに対して、後者は『法界観門』の項目のみを記して内容を省略するという相違がある。先行研究では経録などの記述や、文献学的検討によって各書の正当

性が主張されたものの、結論は下つていない。

また、先行研究のほとんどがこの書誌学的問題に偏重した結果、『華嚴三昧観』の思想構造や基礎概念の解明は十分に進んでおらず、法蔵観行思想の体系的理解には、依然として大きな課題がある。

本研究は、かかる現状を打破すべく、二つの目的を掲げる。第一は、これまで未調査であった写本群を含む諸本の網羅的な校合研究に基づく、学術的に信頼しうる『華嚴三昧観』原初形態の復元である。第二には、その成果を基盤として、本書の思想内容を精緻に分析し、法蔵観行思想研究の礎を構築することである。

第一章 法蔵の実践的事績と著作

本章では研究の背景として、法蔵の実践的志向を論じた。信頼性の高い初期の伝記は、『梵網経』に基づく厳格な持戒、日常的な『華嚴経』の読誦などを記録し、法蔵の篤実な修行者としての姿を伝えている。また、法蔵は著作中で数度智顛の天台止観法門に言及している。特に『起信論義記』は元暁『海東疏』に準じて『小止観』の修禪法を詳細に引用することが知られているが、諸本との校合により、当該箇所が単なる孫引きではなく、法蔵自ら『小止観』原文を参照していることが判明した。以上の事実、法蔵が智顛の実践論を主体的に受容していたことを示唆している。

第二章 『華嚴三昧観』の諸問題

次に、『華嚴三昧観』の原形を特定し、文献研究のための基盤を確立することを試みた。『華嚴三昧観』は法蔵の他の著作の記述から、十門十義の構成であること、十重唯識に対して観行の立場で十重の教えを説いてい

ることが判明している。また、宗密『行願品疏鈔』と崔致遠『法藏和尚伝』に逸文が存在するため、これらに合致することが『華嚴三昧観』として認定するための必須条件となる。

本研究では、これまで未調査であった写本を含む資料を網羅的に校合した結果、現在流布している大正蔵本『発菩提心章』及びその底本の諸刊本には、後代の思想の挿入や改変、誤写が多数認められ、資料としての信頼性に著しい問題があることが明らかになった。そこで、信頼性の高い写本系統の『発菩提心章』と『三昧章』、『法界観門』を比較したところ、文脈上の整合性や脱字の少なさから『発菩提心章』が他より明らかに古い形態を留めていることが論証された。また、現存する複数の逸文との比較においても、いずれも『発菩提心章』と高い近似性を示すことを確認した。以上の検討により、写本系統の『発菩提心章』が『華嚴三昧観』の内容を正確に伝えていて、『三昧章』は後代の成立であると結論づけた。ただし、『発菩提心章』には、構成において後世の改変と見られる箇所が存在し、更なる説明が求められる。

第三章 別教の菩薩行と三昧

本章では、『華嚴三昧観』の観行思想を論ずる前提として、法藏の成道論に関連する基礎的事項を確認した。

第一節では、別教の行位論を検討した。法藏は修道階梯として、円融相撰門と、次第行布門を併説する。前者は一位即一切位のために個別の階位を立てない別教の究竟である。対して後者は方便として階位を仮設した説であるが、これには形骸化した他派の行位論への鋭い批判が内包されている。その具体例として、『五教章』では三生成仏のような簡素な行相を示し、『探玄記』では他学派に準じた階位を立てつつも、それらが仮説であると、

普賢行の名のもとに固定的な行位に捉われない行の自在性を顕示している。こうした主張は別教の深遠な教義を宣揚すると同時に、煩瑣な行位論に捉われない法藏の現実的思索を表している。

第二節では、観行によって目指すべき境地としての華嚴三昧について論じた。法藏は初期の著作から一貫して、智儼以来『華嚴経』の根本定にされる海印三昧を重視する。しかし、『探玄記』撰述前後からは新たに華嚴三昧にも着目し、『華嚴経』自体を信・解・行・証の四つの修行階梯として把握したうちの行の境地を表す三昧に位置づけた。特に観行思想においては、『華嚴三昧観』で題目として、『五教止観』と『遊心法界記』で円教の観の呼称として用いるように、華嚴行者が観行を通じて到達すべき境地を表す中心概念として重用している。華嚴三昧の重視は、因分可説果分不可説の語に表れるように、法藏が修行者の実践可能な到達点を果分ではなく因満の境地に設定したことに起因すると推測出来る。事実、『遊心法界記』では海印三昧を不可説の果に約した三昧、華嚴三昧を因満を表す三昧として明確に弁別している。

第四章 華嚴観行の具体相

本章では、『華嚴三昧観』（『発菩提心章』）に説かれる観行思想を具体的に検討した。

第一節では、観行思想の基底となる解・行および観・行の思想的展開を論じた。解・行の概念は、法藏初期の著作『十二門論宗致義記』において、空有円融の義を理解する「解」と、その知的理解を超えた無分別の心境である「行」として初めて定式化された。当初は三乘的な空観の文脈で用いられたこの思想は、一乘の修道論へと展開する中で、「行」という無分別の境地にありながら、それを妨げることのない智慧の働きとしての

「観」の活動性を認める観行無礙の思想へと深化する。これは、静的な行（自利）と動的な観（利他）が円融無礙に顕現する別教の理想的な菩薩行を示すものである。『発菩提心章』を含むすべての観行書では、三乗の領域に淵源を持つ解・行の枠組みが、別教一乗の究極的な境地である観行無礙を開示するための、不可欠な階梯として構造的に位置づけられている。すなわち、浅近な方便から深遠な実義へと修行者を段階的に導引するといふ、緻密な教導的配慮が看取される。

第二節では、『発菩提心章』の第三顕過と第四表徳について分析した。

この思想の濫觴は『十二門論宗致義記』にある。顕過は縁起を空あるいは有として把握することの過失を顕して迷情を破すことを指し、表徳は二諦中道の徳を表すことを意味する。『発菩提心章』や晩年に近い観行書と考えられる『五教止観』においては、顕過・表徳はともに別教の観行を説く前の階梯に位置づけられている。しかし、法蔵の晩年または弟子の撰述の可能性が高い『遊心法界記』では、暗に遮情（顕過）を空有無礙のみを表す三乗義、表徳を一多相即を表す一乘義へと振り分ける思想的展開が確認出来る。

本研究では、顕過・表徳が不可分の対概念であり、法蔵の『十二門論宗致義記』にその淵源があることを思想的に解明したことで、顕過を除き表徳のみを含む『法界観門』が独立した杜順の著作ではなく、『華嚴三昧観』からの抜粋であることを明らかにした。この事実は、第二章の書誌学的考証と相まって、先行研究における『華嚴三昧観』と『法界観門』の成立に関する論争に終止符を打つ決定的な論拠となる。さらに、『遊心法界記』に見られる表徳優位への思想転換から、『法界観門』は『遊心法界記』の思想に通じた人物によって、円教の観行に特化した抄録を意図して、敢えて顕過を除外した形で作成されたと推測した。

第三節では、実践の核心をなす止観思想を論究した。法蔵は止観を三乗

と別教一乗の二つの階層において展開する。まず三乗の止観は、『起信論』に依拠し、「止」を諸縁を断絶し万有の平等的側面を観想すること、「観」を現象世界において大悲の利他行を実践することと定義する。晩年には元暁『海東疏』の影響を受け、空有円融を説く中観的な解釈が加味された。しかし、これはあくまで基礎的段階に位置づけられる。法蔵が究極的な理想とする一乗の止観においては、「止」と「観」とが相互に妨げることなく無礙である止観双行が至高の境地とされる。

この論理構造は、『発菩提心章』の色空章十門止観の十門において、最も体系的に開示される。前半の五門では能観の心たる止観と所観の境たる色・空の融通（心境無礙）を明かすのに対し、後半の五門はそれを踏まえ、後世に言うところの事事無礙を開顕することで、止観の円融無礙な実践を理論的に担保している。ここに、教理と実践とを統合した法蔵観行思想の真髓が見出される。

結 論

本研究は、網羅的な校合研究により、現存の写本系統の『発菩提心章』が最も正しく『華嚴三昧観』の原形を伝えるものであることを特定し、法蔵の観行思想研究における文献的基盤を確立した。その上で、従来看過されてきた法蔵の観行思想の階梯的構造と基礎理論の一端を解明した。その結果、法蔵の思想体系が別教一乘義に限定されず、三乗から別教一乗へと至る段階的かつ包括的な領域を有していることが明らかになり、法蔵思想の研究に新たな視座を提供した。

優秀修士論文概要

六朝隋唐における仏教者の道教認識

今田 星 紀

仏教者による道教への認識は様々である。それは道教が潜在的に持つ多面性に由来すると思われる、仏教者が接触した道教の一形態に必然性を見出すことは容易ではない。また、道教経典と一口に言ってもその内実は様々であり、『老子』や老子に関する信仰によって生まれた経典、『抱朴子』のような神仙術の書、あるいは太平道や五斗米道(天師道)に由来する経典、仏教・天師道・江南地域の神仙道の習合によって成立した靈宝経や上清経と呼ばれる経典群、隋唐期における道教教理の成熟に伴って出現したものとがある。道教内部では六朝末期頃には既にこうした様々な系統の道教経典を統合的に整理し、それらの総体として道教を意識していたようだが、仏教者のような部外者が皆同じ認識を持っていたとは言い切れない。ただ近年発表された諸研究においても、仏教者それぞれが持つ個人性を踏まえ、た研究は十分になされていない。例えば北周で成立した甄鸞「笑道論」の中で江南成立の道教経典が盛んに引用されていることを、同時代の一般の関心と結びつける研究もある。確かに仏教者の護法文献には甄鸞「笑道論」や法琳「破邪論」・「弁正論」のように道教経典を直接引用し、極めて詳細に道教の邪説を排撃することを目的としたものもある。六朝期以降から初唐にかけて成立した道教経典に関する研究は近年急速に進展し、成立年代や制作者、思想内容などが明らかになってきたが、その際に仏教側が残し

た護法文献に載せられる道教経典に関する記述が多くの示唆を与えることも多い。しかし、護法論文集である『弘明集』・『広弘明集』に収録される地域や時代、背景様々な論者による論文、あるいはそれ以外の様々な資料を俯瞰しても、道教経典に精通するような論者はわずかであり、その他様々な道教認識のあることが知られるのである。以上を踏まえ、本論文では種々の道教認識が如何なる傾向を持つものであり、その認識がどうして成立したのかを、仏教者個々人が接触した道教経典とその思想の受容に着目して明らかにすることを目的とした。

第一章 仏教者の道教認識の諸相

本章では劉宋期に陸修静が完成させ提出した道教経典の分類形式である『三洞経書目録』(四七一)に含まれ、その後の道教史で長きに渡って權威を持つ江南成立の靈宝経や上清経のような経典群(以下「三洞経典」)に着目し、それらの経典を引用しているか否かという観点で三洞経典閲覧状況を考察した。その結果三洞経典を引用するのは甄鸞・法琳・玄奘・明槃のわずか四人であることが判明した。また同時に、仏教者それぞれの経歴を僧伝等により確認した結果、三洞経典を盛んに引用する甄鸞・法琳・玄奘はそれぞれ元道士であり、法琳・玄奘に関しては極めて高位の道士であったことが分かった。道士の位階制度を紹介する『洞玄靈宝三洞奉道科戒営始』で明らかのように、道士は修行の進展に応じて上位の経典やそれに伴う符籙、戒律などを授けられたのであり、例えば法琳が三洞経典中で最も上位の上清経を盛んに引用するのは、道士時代に高位の道士であったからであるとも考えられるのである。玄奘「甄正論」については先行研究が乏しく、引用道教経典の一々を考察し、また段落ごとに区分けて全体の傾向を分析し、先行する諸論文との関係を検討するなど、基礎的な作業

を行った。

その他、三洞経典を引用しない仏教者については、まず十七人程の仏教者の記述から引用が見られないことを紹介し、またその中で三洞経典やその枠組みに関する理解が見られる北周道安の「二教論」については先行する「笑道論」の記述に依拠して書かれ、道安自身の見聞によるものではないことを指摘した。その後、北周の廃仏という時代背景を同じくして書かれた智顛『摩訶止観』の記述と「笑道論」、同じく傅奕に対する論難として書かれた李師政「内徳論」と法琳「破邪論」とを比較し、論題が共通する状況において仏教者同士で如何に道教批判が異なるのか検討した。

最後に、明槩については道士の経験はないが、その著「決対傅奕廢佛法僧事」において天師道発祥の地である四川の天師道教徒の有り様を盛んに示していることや、自身も「綿州振響寺沙門」とあるように四川の人間であること、あるいは『統高僧伝』に立伝されるその他の四川の僧侶と道教との浅からぬ関係から、四川という土地では道教が極めて身近に存在し、明槩も道教の教説への理解を深めたということが十分に推測できると結論づけた。

第二章 道教認識の多様性の要因

本章では第一章を通じて述べた道教認識の多様性について、その要因を探るべくいくつかの論点を設けて検討した。まず、仏教と道教における聖典認識、すなわち真経か偽経かを判断する場合における重要な要素を教主に求め、仏道の間でどのような認識の相違があるのか、またその相違が仏道論争の場面において如何に現れてくるのかを考察した。陸修静や陶弘景の記述を検討した結果、道教徒は真人や天上世界からの教説の教授を極めて重んじ、經典の聖性は教主の超人性・非實在性に担保されているという

ことが分かった。一方で仏教では釈尊の教えを一字も漏らすことなく伝えるものこそ真経であり、實在する教主からの教えだからこそ帰依すべきという意識が生まれている。多くの道教経典では歴史的に記録可能な説所や説時が示されないために、仏道論争の場面では仏教者がその非實在を徹底的に批判することを示した。また、多くの仏教者が道教経典の中で老子を比較的尊重するのは、そうした教主の實在意識に基づき、その上で老子を孔子や釈尊より劣っているという論法を用いることが効果的な手段であったことを指摘した。

また道教経典が道士以外にあまり流布しておらず、極めて限定的に伝授されたことを、仏教側からの資料や道教経典に説かれる具体的な規定から考察した。その際に仏教側の思想や状況とも逐一比較することで、両教間の差異を明確化させて検討した。本稿では『無上秘要』・『太上洞玄靈寶授度儀』・『洞玄靈寶三洞奉道科戒営始』などの初唐までの道教資料から經典が非常に長い時間を経過しないと弟子に伝授されないこと、実際の伝授の場における厳格な規則、伝授された後の規定などを確認し、仏教側の資料から道教でそれらが有る程度実行されていたことを確認した。一方で仏教、特に大乘仏教では法施が菩薩の活動の根幹であり、經典にも戒律文献にも読誦や書写が推奨されることを確認した。そして、仏道交渉研究のあらゆる場面において、こうした道教の閉鎖性と仏教の拡散性は大いに考慮すべきことであろうということを指摘した。

また、六朝期の仏教者の中には、道教に深く接していないものの、ある程度の道教理解を持つ者が存在することについて、その大きな要因を道士顧歡との論争である夷夏論争に求め、夷夏論争が道教認識に与えた影響を検討した。現存する仏教側の資料の中で神仙道や老子関係の經典と同列に、靈寶經・上清經・『莊子』を道教経典として認識するのは夷夏論争関係の論文が初めてである。本稿では謝鎮之や明僧紹の論文を検討することによ

り、仏教者が顧愼とのやり取りの中で間接的に道教への理解を深めていった可能性を指摘した。

第三章 智顛の道教批判とその特徴

本章では、第一章・第二章で見た様々な道教認識を踏まえた上で、智顛個人の道教認識の特異性について専論した。智顛はその前半生においては慧思の影響下で道術に親しんでいたと思われる。慧思の『南岳思大禪師立誓願文』では仙薬や金丹の服餌が実践法として組み込まれ、智顛自身も『法華三昧懺儀』・『次第禪門』において道教の教法に基づくような記述をしている。智顛はこれらの修行法を十分益があるものとして捉えており好意的であり、『法華三昧懺儀』等を著した瓦官寺時代の智顛自身がそれらの修行法をいわゆる広義の道教として一括りに認識していなかった可能性が高いことを指摘した。

また、後半生に至ると『摩訶止観』・『法華玄義』等の智顛の著作では、儒教への寛容な態度に比して、老荘に対して極めて批判的な態度を取っていることが分かる。しかし老荘への極めて辛辣な態度に反して、道術に対しては依然として有益性をいうのであり、智顛が老荘以外の道教の要素や道士を排撃するような箇所はない。智顛が真に非難したいのは『摩訶止観』に「莊老を誇談」し、「仏法の義をもって偷んで邪典におく」とあるような老荘に与し仏教を卑しめる仏教者なのであり、北周の廢仏を引き起こした還俗僧である衛元嵩のような人物を非難する手段として過激な老荘批判をしていると思われるのである。

最後に、智顛の老荘批判についてその特異性と後世への影響を述べた。『摩訶止観』巻五下の破法遍の段では智顛の長文に渡る老荘批判があるが、その大半は身体的特徴や行為において積尊と比較した際に老荘が劣るとい

う内容である。「老子」・「莊子」への高い評価は智顛も見ていた『弘明集』全体を通しての傾向であり、智顛はそうした傾向に逆行するが如きである。湛然は『止観輔行伝弘決』巻五之六で智顛の批判が、法琳が道士の李仲卿の積尊批判に対抗して著した「十喻篇」(弁正論)巻六・『広弘明集』巻十三所収)と論点が似ていると注しているが、法琳は天台宗と浅からぬ関係を持つ人物でもあり、智顛の論点一々と対照させた結果、法琳は智顛から影響を受けている可能性があると指摘した。また、八世紀中頃に著された姚本「功一言」「三教不斉論」にも智顛と同様の論点を共有する老子批判がなされ、こうした例から執筆当時としてはかなり過激であった智顛の老子批判が、後世においてはその典型として継承されていったことを指摘し、結びとした。